



博士(人間科学)学位論文 概要書

想起と時間

1997年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

松島恵介

指導教授 春木 豊

概要

本稿は想起において現れる「過去」という時間性、すなわち「過去性」に関心がある。

従来の記憶心理学においては、「記憶」は頭の中の痕跡としてあり、「想起」とはその痕跡に対する検索活動として位置づけられていた。これは<過去/現在>という時間性を含まない、空間的なモデルである。いうまでもなく「頭の中」という空間内に「過去」という時間を閉じ込めることは不可能である。こうした空間モデルでは、過去の「かつてあったが、もはや『ない』」という時間的本質を的確に捉えることができない。仮に、自ら「もう『ない』」と主張する痕跡、という表現を用いたならば、それは明らかに自己矛盾である。

従来のいわゆる実験室的記憶研究のみならず、日常記憶研究、社会構成主義的記憶研究等、あらゆる記憶の心理学的研究は、すべて過去という「時間」を扱うことが出来なかった。それらが過去という時間を還元する先は、脳内の「空間」的貯蔵であったり、日常「空間」（想起の場所・文脈・記憶の『外的』補助）や社会的「空間」（役割・アイデンティティ）であり、すべてが「空間」の議論であった。

想起者にとっては過去は「もはやない」ものである。想起者にとって過去が「もはやない」ものであれば、それを本質的に理解しようとするには「もはやない」ものに出来る限り接近しなければならないだろう。「もはや『ない』」ものが唯一現象するのは、「想起」という場面に限られる。想起された言葉のなかに出現する、「もはや『ない』」過去が現在と出会う「出会う方」から過去の本質を探るしか方法はない。すなわち、「もはやない」形態として提出されている想起プロトコル（プロトコル：音声記録が文字化されたもの）を、それ自体において検討することをおいて他に方法はないのである。

このように、過去と現在の関係として想起を捉えなおし、その関係のあり方のなかに「過去」という時間の存在をみていこうとする方法論が、第1章と第2章において中心的に展開された議論であった。

第3章と第4章においては、日常的な「過去」を巡る<語り手—聞き手>のやりとりのなかで、「過去」がどのように扱われていくのかが主に議論された。

第3章と第4章前半部においては、第三者が想起を要請した場合、すなわち、「第三者」の「現在」が、「他者」の「過去」を要求した対話における、「過去」のありかたが検討された。我々の日常において最も客観的に「過去」を想起させようとする場である裁

判における想起を巡るやりとりのプロトコル分析がなされた。そこでは、「過去の事実をただしく知る」という目的を強く質問に反映させればさせるほど、逆に、想起における過去の時間性が剥奪され、論理性という平板な「無時間」に吸収されていくことが示された。また対照的に、第4章後半部においては、想起の自主性が保証されている日常対話事例が検討された。そこでは、想起者の「現在」と「過去」が、第三者の「現在」や無時間的な「論理性」によって侵されることがなかった。さらに、本来他者にとって不可知かつ不可侵である「心的過去」が他者にとって、そのまま「了解可能」なものとして聞き手に受け容れられ、対話場において存在できていることが明らかになった。

さらに、第5章以下においては、過去性の意味をより深く論じる目的で、一度に纏まった量の想起がなされかつ「自主的に」想起がなされている現場が、時系列的に観察・検討された。対象は「酒を飲まない」という明確な「現在」をもつ断酒会とされた。「過去」であることが端的に表されている「時制」が中心的に分析された結果、断酒者の想起が、「過去と現在の差異化」であると同時に「過去と現在の近似化」としての働きを持つことが示唆された。また、「過去」のもつ過去性と不在性とが、断酒者のアイデンティティの次元において組み込まれている有り様が明らかにされた。第6章においては、断酒者が同じ出来事を何年間も語っているにも関わらず、特定の部位において吃ったりうまく語れなかったりする事実と、過去を想起しているというよりは過去を現在において体験しているような語りとが発見された。これらの特徴的な発話が総じて「『動き』にかかわる部分が言語的秩序をこわすようにして露出していること」・「言語的機能を殆ど持っていないこと」・

「過去を現在あたかも行為しているように語っていること」であることから、彼らの想起が、過去を言語という表象に置き換えて現在に持ちきたらすものであるというよりも、現在において直接「『過去』を『行為』する」ような性質を持つものであることが強く示唆された。この示唆が理論的な問題とともに検討されるなかで、「『過去』が、『現在』における想起という行為において生成される」事実がより鮮明になった。